

ソーシャルワークはクライアントとの共同作業

一般社団法人 WITH 医療福祉実践研究所 佐原 まち子

ソーシャルワーク実践を振り返るとき、その時その時クライアントの暮らしの先を考え必死に支援をしてきた。しかし、その支援結果がその人の人生にどのような影響をもたらしたかを見ることはなかなかできない。

Aさんと出会ったのは40数年前本人が15歳の時だった。小学生のころから学校でいじめられることが多く、中学に入りさらにいじめがひどくなり登校できなくなった。軽度の知的障害が後にわかるが、小学校・中学校とも普通学級に通学していた。運動も勉強も苦手でおどおどする振る舞いはいじめの対象になった。中学3年の時に洗浄強迫や、確認強迫などの行為が強くなり精神科外来に受診することになり、軽度精神遅滞、強迫性障害と診断された。主治医からソーシャルワーカー（以下SW）に今後の方向付けを目的に介入依頼があり担当になる。当時総合病院の相談室は精神科からの相談も多く、Aさん以外にも先の方向性に迷う若年のケースを複数支援していた。彼らとの個別面接の中から、本人たちのニーズとして居場所を求める声が聞かれ、SWはその解決のためにグループワークを毎週1回実施することとした。

当初Aさんはいじめの不安から抜け出せず、電車バスに乗れず家から病院に通うことが精いっぱいだった。過度の謝罪や許可を求める、外食ができない、物を素手で触れないなどの強迫行為も多かった。顔を見て話せず、会話や書字の末尾に「さん」を付けるなど奇異な行動も多々見受けられた。まずは本人の状況をそのまま受け入れ、本人が安心できる行動の根本にある意味を共に明らかにすることで少しずつ変容を促した。非難されない安心できる環境を作ることに注力し、グループメンバー・地域ボランティア・医療スタッフを巻き込み他者からの暖かい励ましを受け入れていった。その結果、メンバーとの外出や新しい体験プログラムにも参加できるようになっていった。

その後SW支援によりアルバイトの仕事に就くことになったが職場で再びいじめを経験したことで中断、調子を崩し入院になった先でも他患からいじめにあうなどを経験したことから、自立した社会生活につながることは厳しかった。両親もSWの相談面接を受けながら穏やかに暮らせる家庭を居場所の中心にすることを受け入れていった。

その後総合病院精神科から主治医の退職などで地域のクリニックに通院を変更し、両親との静かな生活が継続していた。SWとは年賀状や季節のはがきのやり取りを通し暮らしぶりを把握する関係が続いたが、本人が50代半ばを迎えたときに再び担当SWとなる機会を得た。

父親はすでに他界し80を超えた母親も体調崩し入院を繰り返す状況となり、今後本人が一人で生活していく準備を支援することになった。久しぶりに会ったAさんは40年以上前のグループワーク仲間との経験を鮮明に記憶していた。当時の事をSWと共有できる面接場面では一人一人の名前を挙げ、昨日のここのように生き生きと繰り返し繰り返し語る姿が印象的であった。安全な居場所の存在が、その後の本人の暮らしの大切な思い出であり基盤になっていたことを教わった。

昨年母親が亡くなり兄弟親族のいないAさんは、人生で初めて一人暮らしの生活をスタートすることになった。人と交流することは今も緊張があり得意ではないが、過去のように他者を拒否する姿はなく、地域のサポートを信頼し不安なく一人暮らしを準備する本人の姿があった。

SWがAさんの支援において気を付けてきたことは、一方的にこちらが良かれと思う支援計画を押し付けないこと。Aさんに伝わる言葉を選び、説明する方法を工夫し、本人を抜きにせず、目の前で地域との連絡や協力を求めた。本人が選択できるように情報提供に注意し共に考え、自己決定できることを最優先に共同作業を進めてきた。

SW支援は目先のイベント支援ではなく、その後も続くその人の人生を長期的に見通し、クライアントが自己信頼性を高め自己決定できるように共同で進めるソーシャルワークである。Aさんの長い時間の経過を通しSW支援の大切さをたくさん教えてもらった。

事例は、個人を特定する情報を極力削除または再構成したものである。